



日本SPF豚協会だより

2022. 7
No.88

提言

信頼回復に向け一丸となつての努力を

一般社団法人日本SPF豚協会 会長

北島克好

以前、協会だよりにおいて「豚熱発生が拡大するなかで、SPF豚農場はさらに防疫意識を高め発展的に事業を継続されています」と述べました(80号『提言』)。しかし、昨年12月、協会認定農場で初めて豚熱の発生が報告されました。バイオセキュリティが最も厳しいとされていたGP農場であったこと、法的措置が種豚・AI精液の流通先の農場にまで及んだことから、その影響は大きく、生産者および関連業界等に衝撃が走りました。

飼養衛生管理基準を遵守し、ワクチン接種も実施していたにもかかわらず感染経路が成立してしまったことは、協会としてもにわかには信じがたいところでした。改めて疾病の侵入を防ぐことの困難さを痛感しましたが、結果的に行政をはじめ関係者の協会認定事業への信頼を揺るがすことになりました。その後実施された行政による疫学調査により防疫上の課題も明らかになってきました。

SPF豚農場認定規則に基づき、当該農場からは疾病発生当初より随時報告がなされており、今後オールアウト後のGP農場をスクラップ&ビルド方式で新たなGGP・GP農場として再建し、生産者の信頼を取り戻したいとの意向で検討・準備を進めているとのことです。協会としても認定委員会を中心に全面的にサポートし、信頼回復に全力を挙げたいと考えております。

3月開催の農場認定委員会では、当該ピラミッド認定委員から豚熱発生の経過について詳細な説明を受けました。学識経験者認定委員から今後の対策等について助言があり、それを踏まえて、各ピラミッドはGGP・GP農場の防疫について再点検し、強化をはかることとしました。なお、当該GP農場は、認定更新を停止いたしました。

4月には今後についてピラミッドと協議いたしました。ピラミッドからは「稼働から50年近い農場の老朽化に加えて、東日本大震災や豪雨による被害が重なり、山積された問題の優先順位もあって修理・

補修が追い付かず、畜舎の外壁を含めハード面でのほころびが生じたことは否めない。感染経路が成立してしまった事実を重く受け止め、今後は協会の指導・協力を仰ぎながら、再建を果たし、信頼回復に努めたい」との発言があり、具体的な再建計画について報告がありました。

SPF豚農場認定委員会の濱岡隆文委員長からは「SPF認定農場に対する信頼を回復するには、該当農場における問題点を分析した上で改善点を明確にして出直すことが重要、それが協会全体の信頼につながる。ピラミッドとして、GGP農場の防疫体制も併せて再点検・強化した上で、透明性をもって状況を開示、報告しつつ再建に注力してほしい。協会としては、常に状況を把握、確認しながら最大限支援していきたいと考えている」との発言がありました。認定委員による現地視察を含めた支援策を検討しつつ協力していきたいと考えています。

6月の認定委員会ではピラミッド内に設置された再建委員会から進捗状況の報告を受けました。理事会・定時総会においてもその都度概要を報告しております。

なお、協会の今年度の事業計画については本号に掲載していますが、最重要課題として、認定農場防疫設備の確認・徹底をはかることとしました。今年度はCM農場防疫設備点検実施年となっております。GGP・GP農場についても、原点に戻って再度見直し、その取り組みを随時ご紹介できればと思っています。

SPF養豚はゼロからのスタートでした。半世紀以上に亘り、困難で厳しい状況下においても、SPFプライドをもってSPF豚事業に取組み、再生を果たしてきた多くの農場の歴史があります。協会は、今回も農場再興にできる限りの支援・協力をを行い、ピラミッドと一丸となって信頼回復に向けての取組みを進めていきます。

今年度もリモート参加と併用で 定時総会を開催 全議案を承認

本年度の定時総会(第18期代議員会)は6月17日(木)、東京都千代田区のKKRホテル東京において開催いたしました。昨年同様、会場における感染対策を徹底し開催する一方、リモート参加も可能といたしました。委任状含めほぼ全員の出席をいただくことができました。昨年度の事業経過・決算報告、今年度事業計画案および予算案などすべての議案について、ご承認いただきました。事業経過報告および事業計画案の概略を掲載します(会員の皆様には議案および議事録をお送りいたしました)。

●令和3年度事業経過報告

協会活動はコロナ禍の中で、昨年に続き大幅な制限を受ける展開となりました。役員会、ピラミッド会議はオンライン併用で実施しました。定時総会および理事会もコロナ対策を徹底したKKRホテルの会議室を使用、時間を短縮しオンライン併用で開催しました。認定事業も、前年度発出した非常事態宣言を受け、期間限定の代替検査法による認定も併用しました。

SPF豚セミナーは一旦延期したうえで年明けの1月開催いたしました。KKRホテルの会場参加は、演者を含む関係者のみとし、参加者はオンラインでの視聴としました。恒例の成績最優秀農場の表彰は、農場とピラミッドの協力により表彰式を現地で実施、セミナーの際にその模様を上映しました。

年末には協会認定GP農場において豚熱が発生するという大変残念な事態となりました。直ちに臨時役員会で協議、各ピラミッド、傘下CM農場に文書にて注意喚起を促しました。

協会ホームページ充実を図るため、協会創立50周年を記念して制作された『日本SPF豚協会50年史』や、過去に発行された協会だよりをすべて電子書籍化、最新号までだれでも手軽に読めるようにいたしました。協会パンフレット改訂については、改訂のポイントとなるSPFポークの食味試験等について専門家に助言を求めたところ方法を含め十分な検討が必要であるとのことで、完成には至りませんでした。例年の「ちくさんフードフェア」は早々に中止が決まり、千葉県認定農場にご協力いただいている「こども食堂」への食材提供は途切れたままです。実験用家畜ブタ生産農場のAW状況調査と啓発については実施を見送りました。

SPF豚認定農場の現状は、認定農場数183農場(GGP・GP農場18農場、CM農場165農場)、飼養母猪数は77,248

頭でした。CM農場の生産成績をみると、一貫生産農場の1母豚あたり年間肉豚出荷頭数は23.1頭(昨年度22.8頭:全国平均20.5頭)、出荷肉豚1頭あたりのA薬品費(抗菌性物質)は247円(同242円:全国平均は約800~900円)、農場飼料要求率は3.13(同3.14)でした。繁殖専門農場では、1母豚あたり年間子豚出荷頭数は24.2頭(同24.3頭)、出荷子豚1頭あたりA薬品費は134円(同110円)、肥育専門農場の出荷肉豚1頭あたりのA薬品費は119円(同121円)でした。

令和3年度の事業経過はつぎのとおりです。

- ◇10年後を見据えた協会のあり方、ヘルスチェック検査の課題等について役員会、ピラミッド会議で検討
- ◇整備した認定細則に基づく移行期間とし、新様式の認定申請を推進し認定規則および細則を合わせた冊子を印刷、配布。
- ◇認定委員会を6月3日、9月9日、12月2日、3月10日にリモート併催
- ◇令和3年度の理事会を3月25日、KKRホテル東京にてリモート参加併用にて開催
- ◇第17期定時総会を6月16日、KKRホテル東京にてリモート参加併用にて開催
- ◇防疫設備基準、防疫管理基準の徹底を図るため、認定委員会において農場ごとにアドバイス、要望事項等をピラミッド委員に通知
- ◇全認定CM農場の生産成績と過去の成績推移について、認定証発行時に各ピラミッドを通じて農場にフィードバック
 - 毎年生産成績が、上位25%に規定年数在位している農場に成績優秀の証しとしてAマークを貼付
 - 年度末に、各認定項目の順位表を作成し、各ピラミッドを通じて農場にフィードバック(ベンチマーキング)
- ◇生産成績最優秀農場選考委員会を8月27日に開催

総合生産成績最優秀農場 (株)広島ポーク(広島県、全農畜産サービスピラミッド)

商品化頭数最優秀農場 (農)八幡平ファーム(岩手県、全農畜産サービスピラミッド)

表彰式を現地で実施、その模様をセミナー会場で上映

◇ピラミッド会議を8月27日に開催、セミナーの開催時期の変更、10年後の協会事業のあり方、今後のと場でのヘルスチェックについて、新細則に基づく認定業務等について検討

◇1月26日 SPF豚セミナーをKKRホテル東京よりオンラインにて開催

・CM農場生産成績年次報告

・生産成績優秀CM農場表彰(選考結果・講評、表彰式動画)

・講演「海外産輸入豚肉の現状」伊藤忠商事(株)畜産ビジネス課・山下剛史氏

・講演「豚肉の品質、とくにおいしさ評価について—SPFポークの付加価値評価に向けて」農研機構畜産研究部門・佐々木啓介氏

◇協会だより83号(4月)、84号(7月)、85号(10月)、86号(1月)を発行

協会創立50年記念誌および協会だより全号(創刊号～86号)を電子書籍化ホームページにて公開

セミナーの動画(CM農場の生産成績年次報告、農場表彰の講評および表彰式の模様)をホームページにて公開(講演1題は3月29日、会員限定、視聴希望者のみに動画配信)

◇店頭用ポークリーフレット改訂版および英語版を引き続き希望会員に無料で配布

デザイン使用申請書の提出を前提に認定マークやロゴマークを提供

販促用資材等の提供

◇SPFポークの食味試験や市場調査について方法を探るため専門家にアドバイスを依頼、取り組み方法含め引き続き検討

◇各種講演・会議への参加

令和3年度家畜衛生主任者会議、家畜防疫対策に関する全国説明会、豚衛生繁殖セミナー、日本医師会・日本獣医師会連携シンポジウム「“One Health”アプローチで取り組む薬剤耐性対策」、飼養衛生管理基準普及開発推進会議、種豚流通に関する全国会議、等に出席(主にリモート参加)

●令和4年度事業計画

◎防疫設備基準、防疫管理基準の徹底

SPF豚農場認定規則及び細則に基づき、厳格な運用を行い

ます。また、5年ごとの防疫設備点検を実施します。

◎協会の将来像、認定制度のあり方についての検討

10年後を見据えた協会のあり方、ヘルスチェック検査の課題等について、諮問委員会を設置し、検討を進めていきます。また、協会のBCP(事業持続計画)対策として、事務局のスリム化等も検討していきます。

◎認定委員会の開催

認定委員会は6、9、12、3月の計4回開催します。状況に応じてWeb会議も併用します。

◎新細則に基づく認定業務への移行、認定委員会の効率化

今年度より新様式での認定申請に完全移行します。併せて認定業務の合理化、認定委員会の効率化も検討・推進します。

◎認定成績集計結果のフィードバック

SPF豚農場認定申請の際に提出される生産成績を集計して、認定証発行時にこれまでの成績の推移を、また年度末に、各認定項目の順位表を、各ピラミッドを通じて農場にフィードバックします。ベンチマーキングに活用して農場成績の改善に役立ててもらいます。また、生産成績のランク分けについて、絶対評価の導入も引き続き検討します。

◎生産成績優秀CM農場の表彰制度の継続

引き続き、総合生産成績および商品化頭数について最も優れた成績を収めた農場を選考委員会により選定、表彰します。また、表彰の対象項目についても引き続き検討を加えていきます。

さらに、過去の生産成績が、規定年数上位25%に在位している農場には成績優秀の証しとして認定証にAマークを付記します。規定年数については、その都度検討します。

◎SPF豚セミナーの開催

従来通りの一堂に会しての開催を目指しつつオンライン併催も視野に入れます。テーマ等も含めピラミッド会議で検討します。

◎ピラミッド会議の開催

セミナーの開催方法やテーマ、10年後を見据えた協会の支柱となる事業および運営方法について検討します。

抗菌物質を使わない養豚のあり方の検討(飼料添加物取消薬剤、テトラサイクリン2種、タイロシン、コリスチンの使用をゼ

口にする取り組み)、豚熱対策の問題点、現実的な防疫設備等の改善点などについて協議します。

と場でのHC（ヘルスチェック）が困難になる中、今後のHC方法についてSPF豚研究会との共同事業も模索しながら検討していきます。

新細則に基づく認定業務の改善点や成績低迷農場の改善策、B薬品費(ワクチン)の費用対効果調査方法などについても具体的に検討します。

◎協会だよりの発行と協会ホームページの充実

協会だより87号(4月)、88号(7月)、89号(10月)、90号(1月)を発行します。

ホームページと併せて会員への情報提供、会員と協会をつなぐ重要なツールとして、内容の充実を図ります。

◎実験用家畜ブタ生産農場のA W（アニマルウェルフェア）状況調査と啓発

今後の可能性を探るため、前年度取り組めなかった実態把握に努めます。

◎SPF養豚に対する勉強会や情報交換会の実施

人数を絞っての勉強会や情報交換会をWeb会議含めて検討します。農場管理獣医師との連携方法や、と畜場に対するヘルスチェックへの協力要請等も検討します。

◎販促用資材等の提供

店頭用ポークリーフレット、協会パンフレットを引き続き希望会員に無料で配布します。協会パンフレットの改訂版作成も検討します。また、認定マークの積極的な使用を会員に働きかけます。

◎食育等への協力

千葉県の認定農場と協力し、こども食堂へのSPF豚ポークの提供を再開させ、また他地域での拡大も目指します。こども食堂の活動状況を把握しながら、可能性を模索していきます。子どもの食に対する関心を喚起していきます。

◎SPFポークの普及

SPFポークの認知度を上げるため異業種との取り組みができないか検討します。

日本食肉流通センター主催「ちくさんフードフェア」の開催が可能となれば10回目となる出展を検討します。また、負担の少な

い形で参加できるイベントがないか、情報収集を続けます。

認定農場の直売やネット販売等の状況、SPFポーク販売店の情報について収集・整備し、正しい情報をホームページ等で提供していきます。

専門家に依頼しSPFポークの市場調査や食味試験などを実施できないか、引き続き可能性を探ります。

●役員・代議員の交代

サンエスブリーディングピラミッドの秦 政弘副会長理事が辞任、次期副会長にシムコピラミッドの増穂賢志理事が就任いたしました。また、サンエスブリーディングピラミッドの理事・代議員として下山 安氏が就任いたしました。

また中部・北信越地区選出代議員の澤村 賢治氏(長野県農協直販(株)SPF種豚センター)に代わり古越 邦彦氏(JA全農長野SPF繁殖センター)が就任されました。

第4期代議員は次の通りです(任期は令和7年まで)。(順不同、敬称略)

<地域選出>

山中 茂樹(北海道、(有)山中畜産)
 日浅 文男(北海道、(有)道南アグロ)
 布施 久(青森、(有)ふなばやし農産)
 渡辺 和宏(岩手、(有)ケイアイファウム)
 高橋 充好(岩手、(有)胆沢養豚)
 飯田 恭久(監事、岩手、全農畜産サービス(株)東日本原種豚場)
 矢吹 和人(理事、茨城、(有)常陸牧場)
 細谷 広平(群馬、(有)ほそや)
 下山 正大(理事、千葉、(有)下山農場)
 綱島 良信(千葉、(株)ツナシマ)
 高橋 秀樹(千葉、(有)ピギー・ジョイ)
 古越 邦彦(長野、JA全農長野SPF繁殖センター)
 小椋 和典(理事、鳥取、(株)西日本ジェイエイ畜産)
 池田 員美(香川、(株)七星食品)
 平 芳紘(長崎、芳寿牧場)
 太田 昇(理事、(株)ファームテック)
 新留 札男(鹿児島、(有)新留養豚)

<ピラミッド選出>

坂口 一平(副会長理事、全農畜産サービスピラミッド)
 増穂 賢志(副会長理事、シムコピラミッド)
 下山 安(理事、サンエスブリーディングピラミッド)
 金内 一浩(理事、ホクレンピラミッド)
 大関 輝男(理事、日本農産工業ピラミッド)

消毒溶液を加温すると消毒効果が上がると考える方が多いようです。

図は食鳥カゴに付着したサルモネラ菌に対する様々な温度における逆性石けん液の除菌効果です。対照菌量は平均対数値5.7 (5桁：10万個レベル) に対して、80°Cで消毒液を加えた液と加えない液の除菌量は同じ4.9 (4桁：万個レベル) で残菌の差は共に1桁、つまり10個レベルなので敢えて消毒液を加える必要はありません。温度が50°Cでは4.4ですが、20°Cでは3.9 (3桁：千個レベル) で残菌は2桁の100レベルも残ります。

一方、動力噴霧器で常温(20°C) の溶液を噴霧すると除菌量は4.5 (4桁) なので、同じ20°Cでは漬けるより多量に噴霧した方が1桁高く、菌を消毒しながら流し出す効果が見えます。

有意に差があるかどうかは最低でも1桁差があることが必要ですから、20°C液への浸漬とそれ以外の方法とは有意差があり、それ以外の方法の間には有意差が無いといえます。

決定的に消毒効果に差が出るのは冬期です。家畜が居ない畜舎で水洗後、消毒する時の温度は舍外よりは暖かでも5°C以下のことが少なくありません。環境温度が10°C以下の場合、消毒薬によっては効果が減弱することが分かっていますので(本稿80、82、84号)、低温に弱い薬剤を使用する場合には加温は一つの手段かも知れません。

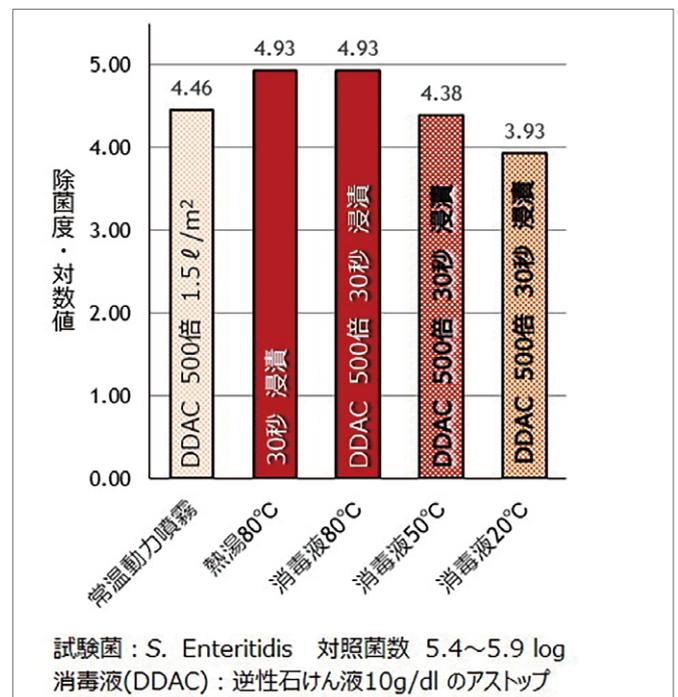
しかし、消毒溶液を80°C以上に加温しても、噴霧ノズルを出た途端に60°C以下となり、また、畜舎内が5°Cでも噴霧面は2°Cということがあり、冷えた面に当たり温度が急速に下がるので加温しても効果は限定的です。

加熱噴霧器を使うメリットは水洗時や消毒時に水蒸気が充

満しますが、汚れ落としが容易なことと作業しやすい点にあります。

表は冷水と温水の消毒効果をみた著者の実験です。洗浄翌日に室温約4°CでビルコンS500倍液を床面に温水噴霧した時の溶液の温度は40°Cでした。冷水消毒と温水消毒の差はなく、噴霧量と除菌効果に差があることが分かります。噴霧量0.6L/m²では同じ場所に噴霧する時間が短いため、噴霧総量が少なく温度も低下しやすいのに対して、倍の量では面の温度が保ちやすく、菌を流し出す量も多いという2つの理由があると思います。

しかし、実際の現場では消毒のために室温を上げたり、冷たい面に長い時間噴霧して多くの溶液を使うよりも、特に、冬期は低温でも消毒効果の高い薬剤を使う方が合理的です。



サルモネラ菌に対する加温消毒の効果

	事前 (6箇所平均)	洗浄後 (6箇所平均)	消毒後 (6箇所平均)
1 冷水洗浄 + 温水消毒 (0.6L/m ²)	3.6×10 ⁶	1.3×10 ⁴	1.3×10 ²
2 温水洗浄 + 冷水消毒 (0.6L/m ²)	3.9×10 ⁶	1.8×10 ⁴	4.3×10 ²
3 冷水洗浄 + 冷水消毒 (1.2L/m ²)	2.4×10 ⁶	1.3×10 ⁴	9.9×10 ⁰
4 温水洗浄 + 温水消毒 (1.2L/m ²)	5.0×10 ⁶	1.8×10 ⁴	9.6×10 ⁰

試験場所(分娩舎)：各区母豚床、保温箱床、アソウ壁 各2分焼房
実施時期：2007年2月、室温4～4.2°C、吹付面温水温度約40°C
実施方法：洗浄剤1%液 散布1時間後水洗、複合塩素剤 500倍液噴霧
採材：洗浄・消毒30分後採材、検査 miyake

冷水と温水、噴霧液量による洗浄・消毒の効果

第10回

農場バイオセキュリティ強化のための最新情報



消毒溶液の加温は有効か

アニマル・バイオセキュリティ・コンサルティング(株)

三宅眞佐男

トピックス

●国際養鶏養豚総合展（IPPS）2022 が開催 協会ピラミッドや賛助会員も多数出展

4月27日～29日の3日間、愛知県・ポートメッセ名古屋において「国際養鶏養豚総合展（IPPS）2022」（国際養鶏養豚総合展運営協議会主催）が開催されました。新型コロナウイルス感染拡大の影響で1年延期され4年ぶりの開催となりました。行動制限が解除されてから初めての大型畜産イベントとなりましたが、展示会場を従来の3号館に加え2号館も使用し、コマ割りも広くして密を避けるなど安全対策にも配慮されていました。3日間のべ来場者は2万2600人を超え、出展社数も過去最高を数えるなど、盛況でした。

協会ピラミッドでは全農畜産サービスピラミッドとシムコピラミッドが出展。また、協会賛助会員である東京食肉市場株式の木村敬専務取締役営業本部長が初日の特別講演会で「2022 変動する豚肉の生産と需給動向」と題し講演されたのをはじめ、多くの賛助会員が出展されており、来場者の高い関心を集めてい

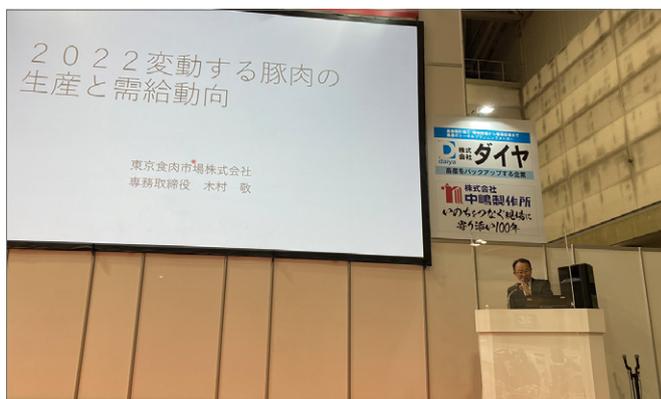
ました。

協会特別会員・賛助会員の出展社は次の通りです（順不同）。

- JA全農
- 伊藤忠飼料(株)
- 東亜薬品工業(株)
- (株)ダイヤ
- (株)新原産業
- (株)中嶋製作所
- オルテック・ジャパン合同会社
- フジ化成(株)
- (株)フロンティアインターナショナル
- 三友機器(株)
- (株)科学飼料研究所（JA全農グループ）



シムコピラミッドのブース



東京食肉市場(株)・木村敬専務の特別講演



JA全農グループのブース



シムコの企業プレゼンテーション

プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



SPFポークと夏野菜の冷製おでん

●レシピ提供・和顔 鶏魚楼（北海道札幌市）

社長 渡邊政之

この夏も全国的に猛暑が予想されています。今回は豚肉と夏野菜を使ったアイディアおでんを教えてくださいました。暑さにうんざりな時、ひんやりさっぱりいただける上に、豚肉のビタミンB1で疲労回復間違いなしです。お休みの日にでもぜひ作ってみてはいかがでしょうか。

●材料●（作りやすい量）

SPF ももブロック肉 150 g

トマト 1個

とうもろこし 1/2 本

ズッキーニ 1/2 本

みょうが 1本

とろろ昆布 適量

鰹節 適量

A

水 1リットル

めんつゆ 150cc

昆布 10g

塩 小さじ1

●つくり方●

- ① トマトのヘタを取り熱湯に20秒程入れ、流水で冷まして皮をむきます。

- ② とうもろこし、ズッキーニは食べやすい大きさに切ります。
- ③ みょうがは小口に切ってざるに入れて5分ほど水に浸し、水気を切っておきます。
- ④ 豚肉を食べやすい大きさに切り、フライパンで表面だけ焼き色を付けます。
- ⑤ 鍋に①②と④、Aを入れて強火にし、沸騰したら弱火にして昆布だけを取り出し、あくをとりながら1時間ほど煮込みます。
- ⑥ 火を止め、粗熱が取れてから冷蔵庫に入れて冷まします。
- ⑦ 器に盛り付け③ととろろ昆布、鰹節をあしらって出来上がりです。

★渡邊シェフからのアドバイス

煮込む際にしっかりあくを取ると、トマトのさわやかな酸味と鰹節、とろろ昆布のうまみが際立ちます。

認定情報

●2022年6月認定農場

（有効期間：2022年6月9日から2023年6月末日まで）

北海道・鈴木ビビッドファーム、青木ピッグファーム(株)、(有)フロイデ農場、岩手県・全農畜産サービス(株)東日本原種豚場、(株)のだファーム第一農場、同第一肥育農場、茨城県・(有)弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、(有)篠崎畜産、群馬県・J A 東日本くみあい飼料(株)利根スワインセンター、利根沼田ドリームファーム(株)、(株)畜産経営研究所前橋農場、千葉県・(株)ユウアイ、木内養豚第1農場、同第2農場、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産名和農場、愛媛県・富永養豚、(株)多田

※次回認定委員会は9月8日(木)の予定

ファーム、J A 西日本くみあい飼料(株)愛媛養豚実証農場伊予スワインガーデン、(株)多田ファーム天貢農場、酒井ピッグファーム繁殖農場、同肥育農場、佐賀県・J A さが天山ファーム、長崎県・(株)伊藤ファーム、(株)濱田ファーム、J A 全農長崎県本部五島種豚供給センター、宮崎県・(有)レクスト繁殖農場、同肥育農場、ジャパンミート(株)川南農場、ジャパンミート(株)御池農場、クリーンファーム(株)、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)三笠農場、(有)さつま農場、(株)かいたく大口農場(以上35農場)

※3月の認定委員会で3か月の認定期間延長が認められ、今回認定された農場

秋田県・(有)十和田湖高原ファーム、島根県・奥出雲ファーム(有)、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)出水農場、同阿久根農場

(以上4農場)



株式会社 シムコ
(東京都江東区)

SPF 豚の発展と共に 種豚作り 50 年

～国内種豚会社として 100 年企業を目指して～

シムコの岡村 寛副社長(左から2人目)と営業部の皆さん(4/27, IPPSの会場にて)

協会生産ピラミッドの一つである(株)シムコは、東京の下町風情が残る江東区亀戸に本社を置きます。亀戸餃子、亀戸ホルモンなどの下町グルメ、亀戸天神や七福神祭り、藤祭りなどが知られています。

弊社は1964年11月の創立以降、1971年 6月テイジン味えさ畜産株式会社、1977年11月サンエー養豚株式会社、1985年 2月株式会社シムコと、幾多の変遷を経て現在に至っています。ここまでの58年間、業界を揺るがす疾病の脅威、未曾有の自然災害、世界情勢の変化など、さまざまな時代の波の中で、生産者、関係者の皆様に支えられながら今日まで歩んできました。

高度成長期以降、海外からの種豚輸入により優秀な遺伝子が次々と導入され、生産性や肉質面において改良が進みました。一方で幾多の疾病も浸潤することとなり、日本の養豚産業にとって多大な影響を及ぼしたことは周知の事実です。このような中、日本SPF豚協会の発足の意義、担ってきた役割は言うまでもありませんが、協会ピラミッド関係者が一丸となって国内生産、SPF豚の発展に取り組み続けたことも日本の養豚産業を支える力となってきたと言えるのではないのでしょうか。

弊社は全国の6農場(秋田、宮城、富山、千葉、鹿児島2)と育種技術部、衛生部が中心となり生産を行っています。最近では農場現場における女性社員の比率が高まっており、活躍も目覚ましいものがあります。また、社員同士の結婚の知らせも幾つか届くようになりました。時代の流れとともに、職場環境

も変化しているなど感じています。これから先も、新しい働き方を模索し、それに合わせた環境整備を進めていくことが、安定した生産のために重要であると考えています。設備のリニューアルも積極的に実施しており、全農場が最新設備に生まれ変わりつつあります。設備の進歩も日進月歩であり、使いこなすのにもひと苦労ですが(汗)。

営業部門は東京と鹿児島島の2拠点体制で、全国のお客様に種豚、精液、その他商品をお届けしています。生産者の皆様の声を聞きながら、そのニーズに応えるべく改良を重ねてきました。種豚のラインアップとしては、飼いやすさ・長命性・肉質を重視したスイートマミー(雌)、発育性・肉質を追求したパワーボム(雄)に加え、飼料要求率・繁殖性に秀でたダンブレッドがあります。

養豚とは何年何十年続けて来ても正解のない奥の深い仕事なのだとつくづく思います。また、疾病との戦いの歴史であり、未だ豚熱の脅威も続いています。関係者の苦労は絶えませんが、業界が一致団結することで難局を乗り越えていけるものと考えています。

株式会社シムコは、今後も末永くお客様に「品質」と「安心」をお届けできるように、企業理念である「新たな挑戦・絶えざる前進 ～シムコは豚育種事業を通じて広く社会に貢献する～」を実践し、100年企業を目指します。伝統を大切にしながら革新的な発想を取り入れ、「感謝」の気持ちと「プロフェッショナル」の自負を胸に、社員一丸となって邁進して参ります。(株式会社シムコ東日本営業部・助田信成)

編集後記

今年度に入って、毎月豚熱発生が確認されています。それも抗体産生の隙間をつかれている気がします。また、初期発生が離乳子豚に集中しています。早急な対策見直しを図られてもよいと思うのですが。原因の最終結論が野生あるいは野生化小動物で、それ以上の考察に行きつかないのは何故なのでしょう。一方、養豚業界に重くのしかかる今回の原料高、円安による配合飼料の大幅値上げと踏んだり蹴つたりの感があります。とはいえ、防疫の凡事徹底・継続は大切です。気を引き締めましょう(世)。



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第88号 2022年7月1日発行(季刊)
発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail:j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀